

公益の森づくり推進検討委員会報告書

—120万県民の英知と力による森林づくり—

平成18年3月

公益の森づくり推進検討委員会

はじめに

本県は県土の3分の2が森林です。これらの森林は、私たちが暮らす都市や農山村を包み込むように広がり、洪水や山崩れ、なだれ等の災害から県土を守るとともに、木材やキノコ・山菜等の山の幸をもたらしてきました。また、きれいな空気や豊かな水を生み出し、清らかな最上川の流れや豊かな日本海、さらには「草木塔」など本県固有の文化を育んできました。

しかし今、やまがたの森林では、荒廃が静かに進んでいます。

森林は、見た目では緑におおわれ、一見健全のように見えます。しかし、スギの人工林は、中に入ると昼間でも光が入らず、木は細く混み合って地面が露出した暗黒の森に変わりつつあります。また、ナラを主体とした里山林は、かつての若く明るい林から老齢化が進んで活力が低下し、うす暗く草花や昆虫も消えた沈黙の森へと変化しています。

その背景には、化石資源に依存した生活様式への変化に伴う県民と森林の関わりの希薄化や、今まで森林を守り育ててきた林業・木材産業の低迷があります。私たちは、化石燃料をふんだんに使い、さらに世界中の森林から伐採された木を大量に輸入するようになりました。その結果、地域の木が使われなくなり、森林の育成と木の利用を繰り返す循環の輪を失ってしまいました。

こうした状況が進めば、地域の木を活かせなくなるばかりでなく、災害を防ぐ働きなどが低下して、私たちの生活に深刻な影響を与えることとなります。

一方、森林は、二酸化炭素を吸収して地球温暖化の防止に貢献するほか、自然エネルギーの利用、人の心身を癒す効果など、本県が持続的に発展していくために有用な多くの働きを持っています。こうした森林の働きに目を向け、県民みんなで森林を守り育てる行動を起こす必要があります。

山形県では、平成16年3月に、やまがたの森林を県民共有の財産としてとらえ、県民全体で森林を支えていく「やまがた公益の森構想」を策定しました。本構想の実現には、林業や木材関係者のみならず、県民一人ひとりが森林づくりに関わる仕組みづくりが必要です。

このため、平成17年7月に、今後の森林づくりのあり方を検討する「公益の森づくり推進検討委員会」が設置されました。検討会では、やまがたの森林が直面している課題を掘り下げるとともに、県民の期待を踏まえて目指す森林の姿を明らかにし、「120万県民の英知と力による森林づくり」を提言しました。

先人が育ててきたやまがたの森林を県民全体で支え、未来のこどもたちに引き継いでいくことが、今の時代を生きる私たちの責務ではないでしょうか。本提言を契機として、県民一人ひとりが森林との関わりを深め、行動に移す契機となることを切に願います。

はじめに

1 やまがたの森林の価値	1
(1) やまがたの森林の特徴	1
(2) 県民生活を支える森林のはたらき	3
① 森林が有する多面的機能	3
② 森林は県民共有の財産	5
(3) 循環型社会をつくる木のはたらき	6
① 人と環境にやさしい木のはたらき	6
② やまがたの木を使う意義	7
2 やまがたの森林の危機	8
(1) 荒廃が進むやまがたの森林	8
① 手入れが進まない人工林	8
② 人との関わりが薄れ崩壊する里山林	11
③ 生存が脅かされる生き物たち	13
(2) 木の循環が途切れた現代社会	15
① 低迷するやまがたの林業・木材産業	15
② 海外の森林に依存する日本社会	16
(3) 森林の荒廃でやまがたはどうなる	17
① 水害や土砂災害が増加する	17
② おいしい豊かな水が得られなくなる	18
③ 景観や生活環境が損なわれる	19
④ 生物多様性が失われ野生動物との軋轢が増す	20
⑤ 地球温暖化が進行する	20
(4) なぜ、危機を打開できないのか	22
① これまでの森林づくりの限界	22
② 危機を打開するためには	23
3 今、山形が取り組むべきこと	25
(1) 目指す森林と県民の関わりの姿	25
(2) どのようにして森林を再生し活かすか（基本方向）	28
(3) 新たな森林づくり施策の展開	30
① 環境保全を重視した森林づくり	30
② 県民と連携・協働した森林づくり	31
③ 県民と森林との絆を深める環境づくり	33
(4) 森林づくりを支える仕組みづくり	34
① 新たな推進体制の構築	34
② 新たな財源の確保	35
おわりに	
参考資料	36